宇都宮大学地域連携教育研究センター研究報告 23 : 49-58 (2015)

■研究論文

宇都宮大学ラーニング・コモンズの成果と課題

― スタッフ常駐の効果を中心として ―

Achievements and issues on Learning Commons of Utsunomiya University: Focus on Effects of Staffing

若園　雄志郎※
Yushiro WAKAZONO

要旨：近年国内の各大学ではアクティブ・ラーニングへの取り組みが活発である。これに関連して「ラーニング・コモンズ」の設置を行っている大学も多く見られる。このような状況の中、宇都宮大学では 2013 年度よりラーニング・コモンズを設置しアクティブ・ラーニングの推進を図るとともに、いくつかの大学での取り組みについて調査し、よりよい環境が構成できるようにしている。本学ラーニング・コモンズでの学修の特徴としては、学生個々人が自由に意見を述べることができる環境がつくられており、ジェネリックスキルの涵養が行われることが挙げられる。これに大きく貢献しているのが専任スタッフの存在であり、環境の醸成や指導・助言といった、いわば社会教育的なスキルが重要であるということができるだろう。

キーワード：アクティブ・ラーニング、ラーニング・コモンズ、教養教育、学修支援、社会教育

【目次】

はじめに

1 章　ラーニング・コモンズにおける学習支援
1 節　環境整備
2 節　スタッフによる学習支援
3 節　利用促進・広報
4 節　ラーニング・コモンズの利用促進に関するアンケートおよび利用者アンケート

2 章　他大学におけるラーニング・コモンズ
1 節　国立台湾大学
2 節　大正大学
3 節　立命館大学
4 節　同志社大学
5 節　九州工業大学
6 節　まとめ

まとめと今後の課題

はじめに

宇都宮大学のラーニング・コモンズは、2013 年 4 月にアクティブ・ラーニング関連の活動を推進することを目的として設置された。大枠の目標としては主体的な学びを具現化する 21 世紀型の教養教育を構想することであり、学生個々人の、あるいは学生グループが主体的に課題を発見し、その解決へ向けた話し合い学習を支援することでリベラルアーツの充実・ジェネリックスキルの養成が目指されている。この目標を達成するための方策の一つがラーニング・コモンズの設置である。

ラーニング・コモンズは、ここ数年で主に各大学の附属図書館に設置されるようになった。これらはアメリカの大学図書館に範をとったものであり、大学図書館が授業で教員から教わるといった知識の理解を深めるための場所・資料を提供するだけでは不十分となっており、学生が自主的に問題解決を行い，自分の知見を加えて発信するという学習活動全般を支援するための施設とサービス・資料を提供する必要があるという認識に立つものである [1)]。狭義には大学図書館が提供する利用者サービスの改革ということができるが、これは当然図書館だけの

※ 宇都宮大学基盤教育センター 特任准教授

課題ではなく、上述のようにこれからの教養教育を考える上では大学全体が取り組むべきものであるといえる。そこで本稿では本学ラーニング・コモンズの2013年度の状況を述べた上で今後の課題について提起していきたい。なお、基盤教育B棟1階に設置されていたラーニング・コモンズは改装工事のため9月30日で閉室となってしまったため、10月1日より留学生・国際交流スペースを共同利用する形（以下「仮コモンズ」とする）で継続した。開室時間は9月までは24時間開室（スタッフ在室は10～17時）、10月から2014年3月では9～18時（スタッフ在室は11～18時）である。

1章　ラーニング・コモンズにおける学習支援

1節　環境整備

2013年はラーニング・コモンズにおける学習を支援するために什器類・備品の整備を進めてきた。ここではアクティブ・ラーニング科目ないしはアクティブ・ラーニングを取り入れたその他授業の実施に必要とされるだけではなく、自主的な話し合い学習を行うためには学生同士での課題の共有がもっとも重要であり、必ずしも十分に事前準備された学習をラーニング・コモンズで行うとは限らない、ということを念頭に置いた。什器類の具体的な数量は、6人用テーブル12台、4人用丸テーブル2台、いす80脚、縦型ホワイトボード10台、デスクトップパソコン10台、ノートパソコン2台、プロジェクター1台である。

テーブル・いす・ホワイトボードは人数や話し合いのスタイルに合わせて任意の配置が可能となるよう移動式となっている。また、テーブルは2色×5台、いすは3色×24脚あるために、これを利用したアクティブ・ラーニング科目等の授業におけるランダムな指名やグループ分けが可能である。この他、マーカー類・付箋・模造紙・はさみ・のり等の文房具は自由に利用できるようにした。学生用PCは常設のデスクトップ10台、貸出用ノート2台があるが、常設のものはあくまでも話し合い学習のための資料作成や調査を目的としているため、個人学習を推奨するものではない。

什器類等のハード面だけではなく、利用に関する方針についても明文化する作業を行った。これは学生の利用に制限を設けるということを意図したものではない。あくまでも実務上、利用に関してスタッフ間で統一した見解を持つことが目的であり、基本的には学生による自由な利用が前提となっている。グループ学習における課題の解決、そして新たな課題の発見を支援していくことがラーニング・コモンズでは重要であり、それには自由闊達な雰囲気が必要だと考えられる。そしてその中で学生自身が自律的な利用を行わなければならない、ということも含めて学習することが望まれているといえる。このような観点から「宇都宮大学基盤教育センター「ラーニング・コモンズ」の利用に関する申合せ」を作成したが、制限事項は最低限となるように配慮した。

2節　スタッフによる学習支援

8月1日から9月11日の利用延べ人数は約3750人[2)]であるため、9月までの1日当たりの利用人数は100名弱であると考えられる。10月以降の仮コモンズでは計測器の設置が物理的に難しかったため計測は行っていない。仮コモンズは床面積が以前の半分以下となり、また開室時間も短縮となった。そこで、18時以降の学生からのニーズに応えるため、①地域連携教育研究センターに協力を依頼し、空き教室を利用、②企画広報課に協力を依頼し、ラーニング・コモンズの管理の下UUプラザを開放（「ナイト・コモンズ[3)]」）、といった方策を行った。
ラーニング・コモンズの利用形態を大別すると以下の4つになる。

a）アクティブ・ラーニング科目およびその他授業での利用
b）学生による自主的な話し合い学習
c）主催事業（30分セミナーおよびカフェ・コモンズ）への参加
d）その他（PCの利用を含む個人学習、話し合い学習とまではいえないミーティング、休憩など）

このうちa）に関しては基本的に学習スペースの確保を行うことのみであるが、それ以外の形態においてはスタッフによる助言などといった働きかけが行われている。以下では上記のa）～d）について詳述する。

a）アクティブ・ラーニング科目およびその他授業での利用

2013年度開講のアクティブ・ラーニング科目は前後期合わせて19科目であったが、利用があった授業は前期では「教育の裏側に光を当てる」、後期では「多文化・多民族共生」「ものと文化と社会」の3科目である。科

目数に比して利用が多くないのは、ラーニング・コモンズの開室自体は4月からではあるものの、スタッフが常駐し、什器類の整備が本格化したのは6月以降であったため、すでに開始されている授業での利用が検討しきれなかったこと、後期には仮コモンズへの移転があったために、認知度・使い勝手等において担当教員のニーズに対応できなかったことが理由であるといえる。

アクティブ・ラーニング科目以外の利用としては、「生涯学習社会論」「対人コミュニケーション論」「国際森林科学論」「上級英語会話」「Risk Management (Learning+1)」「日本語教育方法論」、およびゼミによるものがあった。

b）学生による自主的な話し合い学習

ラーニング・コモンズの利用形態で最も多いのが学生による自主的な話し合い学習である。基本的にこの利用形態では、授業で出された課題ないしは授業外で発見した課題に取り組む学生の自主グループによる利用が想定されているものの、現在は暫定的にサークルによる利用も学生による学習の一環と見なして受け入れている。

利用に際しては利用票の記入とアンケートへの回答を求めている。これは話し合う内容を管理するのではなく、どのような学習が行われているのかを調査し、今後の企画・運営に反映させていくことを目的としている。ただし、利用できるのはあくまでも宇都宮大学の学生および教職員であるため、学外からの利用者が含まれる場合はその必要性について確認を行っている。

予約を受け付け、スタッフによる助言を行った実績としては7月は8件、8月は1件、9月は5件である。そのほとんどはサークルによる利用であるが、9月はうち2件が学生による自主的なグループであり、時期は未定であるものの話し合いの開催についての相談が1件あった。これ以外に予約をせず直接ラーニング・コモンズに来室して利用しているグループも多かったが、そのようなグループに対しても定期的にスタッフが巡回を行い、必要であれば助言等の支援を行うとともに、c）の主催事業への案内を行った

c）主催事業（30分セミナーおよびカフェ・コモンズ）への参加

ラーニング・コモンズの主催事業としては「30分セミナー」および「カフェ・コモンズ」がある。30分セミナーは講義形式を基本としており、学習や話し合いを進める上で有用な知識や手法について講義を行うものである。基本的に昼休みに開催時間を設定しており、昼食をとりながら参加可能である。カフェ・コモンズはワークショップ形式を基本としており、特定のテーマに沿って意見を出し合うことを目的としている。両事業とも気軽に参加してもらうことにより、知識や手法を獲得するだけではなく、ラーニング・コモンズ自体の利用を促進させるという意図もある。今年度開催したのは30分セミナーが4回、カフェ・コモンズが3回である（具体的な内容については資料参照）。

30分セミナーおよびカフェ・コモンズはスタッフから学生に対する働きかけととらえることができる。ラーニング・コモンズでは学生による自主的な課題の発見および解決を行っていくことが求められているとはいえ、その方法の習得や動機付けが十分であるとは言いがたい。これら主催事業は定期的に開催されてきたものの、特にカフェ・コモンズへの参加者数が伸びていない。これについて、参加した学生からは概ね好評となっていることから、内容に対する評価ではなく、広報および時間設定の問題が大きいように思われる。また、内容についてはラーニング・コモンズのスタッフだけでテーマを設定するのではなく、他部局との連携も視野に入れて講師ないしはファシリテーターを依頼することも考えて育必要があるといえる。

d）その他

予約をせずに直接来室して利用するグループの場合、その学習内容については不明である。席に余裕がある限りは個人学習や簡単なミーティングを行うことに制限をしていないため、来室者のうち3～4割程度はこのような利用形態だと推定できる。

3節　利用促進・広報

2013年度に行った広報活動としては、

- ラーニング・コモンズの概要に関するパンフレットを作成し、全学に配布
- ウェブページの作成・公開

ホームページ
http://lgec.utsunomiya-u.ac.jp/lc/index.html（8月19日公開）

ブログ
http://uulearningcommons.blogspot.com（11月11日利用開始）

Facebookページ
https://www.facebook.com/uulearningcommons（11月11日利用開始）

・ラーニング・コモンズ内にアクティブ・ラーニング科目およびその他授業や学生の話し合いを通じての学習成果の掲示
・カッティングシート貼付および看板の掲出による利用促進
・ニューズレター「コモンズメール」の発行（第1号（8月31日）、第2号（12月20日））

である。特にブログおよびFacebookページの開設は多くの学生が閲覧していることがうかがえ、学内掲示板へのポスター掲示やちらし配布だけではなく、それらの方法も効果的に組み合わせることでラーニング・コモンズの利用促進を図っていきたいと考える。

4節　ラーニング・コモンズの利用促進に関するアンケートおよび利用者アンケート

ラーニング・コモンズの利用促進に関するアンケートは10月21日に開催された「アクティブ・ラーニング科目担当者のつどい」で担当教員に対して配布したものである。これによればラーニング・コモンズ自体の利用については要望があるといえるが、受講者数との兼ね合いで躊躇してしまう、あるいはすでに構成された15回の授業を改変することが難しい、といった感覚があるといえる。これまでの授業や活動でワークショップに携わってきた経験がある教員であれば十分に活用することができるといえるが、これから取り組もうとする教員に対しては、できる限り多くの事例を収集し提示するデータベースのようなものが必要かもしれず、学内におけるFD関連の取り組みともリンクさせていく必要があるだろう。

利用者アンケートは予約を受けた際、あるいは利用中に代表者に対して記入を呼びかけたものであるが、今回はラーニング・コモンズの移転等もあったため、十分な回答数が得られなかった。今後はアンケートへの協力を求める方法について検討していきたいと考えている。また、学生からの要望については別項でも触れたように学生スタッフ／アドバイザーのような制度によりくみ上げるという方法もあるだろう。

2章　他大学における ラーニング・コモンズ

宇都宮大学におけるラーニング・コモンズをよりよいものにするため、いくつかの大学を訪問し、ラーニング・コモンズにおける取り組みについて調査を行った。以下では国立台湾大学、大正大学、立命館大学、同志社大学、九州工業大学での取り組みについて述べるとともに、宇都宮大学で同様の取り組みを行う際の留意点や可能性について検討を加える。

1節　国立台湾大学

ラーニング・コモンズを所管している教学発展中心は「博雅教学館」の4･5階にある。ここには「教師発展組」（FD担当）、「数位媒体組」（Eラーニング担当）、そして今回訪問した「学習促進組」がある。ラーニング・コモンズは4階にあり、「学習開放空間」と呼称している。これはラーニング・コモンズが新しい概念であるために中国語訳がなく、最適な呼称を公募の上、学生による投票を行って決定したものである。台湾国内においては台湾大学が一番早くラーニング・コモンズの設置に取り組んだため、この呼称は台湾大学が考案したものではあるが、他の大学でも使用している。

アクティブ・ラーニングの取り組みは調査の翌年度から行う予定であるため、まだ具体的には行われていなかった。しかし、ラーニング・コモンズが台湾大学の学生だけではなく、単位互換制度のある台湾市内の12大学の学生であれば利用可能であることから、台湾大学単独ではなくいくつかの大学がまとまって取り組む可能性があるといえる。

2節　大正大学

大正大学のラーニング・コモンズは2010年に設置され、学会や論文[4]で報告がなされているとおり、非常に意欲的な内容となっているといえる。多くの大学では、ラーニング・コモンズは図書館の併設施設として運営されているが、大正大学では本学と同様に図書館とは別の組織として設置されており、これが大きな特徴となっている。

参考とした他大学のラーニング･コモンズは東大福武ホール、函館みらい大、横浜国立大、ICU、お茶の水大、東京女子大などである。フロアはパソコンエリア・グループワークエリア・ラーニングサポートエリア・ミーティングエリアに分かれ、この他にコイン・カード式コピー機3台、コンシェルジュデスク、書架がある。広さは約421㎡であり、本学1階のラーニング・コモンズに比べて約2倍となっている。

学生からの学習やPC（ハード・ソフトとも）についての質問に答えるためのスタッフとしては「コンシェル

ジュ」を配置している。この他コンシェルジュはラーニング・コモンズに関する意見や企画の教務部への提示、他部署との予算や協力に関する折衝、ブログの投稿・ボード等によるイベント案内、などを行っている。

大正大学ラーニング・コモンズは設置から3年が経過し、運営の方向性が固まってきているといえる。最も大きな特徴として大正大学側が挙げたのは、管理運営に直接図書館が関わっていないということであった。しかし、管理運営の主体がどこであれ、その部局内で運営が完結してしまい、他部局があまり参画してこないということは通常起こりえることであるといえる。これに対して有効に機能していることとしては各部局の担当者による定例会である。学生の要望やラーニング・コモンズとしての企画に対して部局内での検討だけではなく、定例会における意見交換や協力の依頼がなされており、同時にそれに対して人員や時間を割くことができているということができる。

ただし、ラーニング・コモンズ担当者は教員ではなく事務員であり、本学では教員を配置していることは大きな違いとして挙げることができる。このことをプラス方向に特色づけるためにも、高等教育や社会教育の理論や知見を元に本学のアクティブ・ラーニングを推進していき、これに加えて他部局との連携を模索していくことによって宇都宮大学独自のアクティブ・ラーニング並びにラーニング・コモンズの運営を実現していかなければならないだろう。

3節　立命館大学

立命館大学のラーニング・コモンズは「ピア・ラーニングルーム『ぴあら』」と呼称されており、図書館併設型である。衣笠キャンパスでは2011年4月・衣笠図書館内に、びわこ・くさつキャンパス(BKC)では2012年4月・メディアセンターおよびメディアライブラリー内に設置された。広さ・席数はそれぞれ291㎡・92席、173㎡・64席、358㎡・110席である。衣笠図書館は主に法・産業社会・文・国際関係・政策科学・映像学部、BKCメディアセンターは主に理工・情報理工・薬・生命科学学部、BKCメディアライブラリーは主に経済・経営・スポーツ健康科学学部に関連した資料が収蔵されている。このメディアセンターとメディアライブラリーはともにBKCにある図書館であるが、キャンパス内の別の位置にある。なお、今回調査を行ったのは衣笠図書館内「ぴあら」である。

図書館内に設置されているため開館時間は図書館に準じており、通常は8時30分から22時である。フロアはパソコンエリア（30台・プリンター1台）・フリーエリア・ディスカッションエリア（3卓・18脚）に分かれている。飲食は蓋付き飲料のみ可である。

コンセプトとしては、「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」「仲間（ぴあ:Peer）とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」である。デザインおよびマネジメントを担当したのは経営学部准教授・八重樫文先生で、①「アカデミック」＋「自由」＋「創造的」な場所：図書館にありながら、開放的でおしゃれな空間、図書館内外からの可視化、統一感のある色の配置、②学生が行きたくなる空間作り:「～禁止」ではなく、「～できます」、図書館の入口横に設置、などといったアドバイスを受けたという。

ぴあらのカウンターには学生によるスタッフ「ライブラリースタッフ」と「レインボースタッフ」が常駐する。前者はぴあら専属ということではなく、図書館全体のサポートであり、主にPC貸出や案内を行っている。後者はPC・情報系サポートだが、2013年度で廃止となる。PCはデスクトップが30台用意されているが、この他にノートPCが90台用意されており（カウンター奥のスリットのある棚が充電装置付きの専用収納庫）、これは図書館内でればぴあらに限らず使用可能である。

また、学習支援として「ライティングサポート」を行っている。これは教育開発推進機構で研修を受けた院生や講師が課題レポートにおける添削・質問・相談や、就職活動や留学などの志望理由書の添削等を対面指導するもので、週3回行われている。基本的には「特殊講義（アカデミック・リテラシー）【日本語の技法】」で課されるレポートの指導を、自己チェック表（ルーブリック形式）の記入と併せて行っていたが、その講義の受講者数が少なくなったため、現在では対象とする講義を特に設定していない。

研修内容は「特殊講義（アカデミック・リテラシー）【日本語の技法】」の文章診断TAとして、添削に関する事前研修およびOJTに加え、基本科目担当者（教員）、事務局（＝教育開発支援課）、配置スタッフの三者で、以下の受講生に対するサポートデスクのルールについて情報共有するものである。ここでは、①テーマを見つける術を教示し、答えを導き出すサポートに徹すること、②受講生に問いを投げかけ、自ら考えさせることを目的とすることに留意している。

図書館に設置するメリットとしては学部色が出ない、ということがある。また、学生の間では、ざっくばらんな話は食堂、個人学習は図書館、まじめなグループ学習

はぴあら、といった明文化されていない規律ができているとのことであったが、学生自身が一定の規律を持つようになることもラーニング・コモンズでの学習として重要な点であるということができるだろう。

4節　同志社大学

同志社大学のラーニング・コモンズは今出川キャンパス・良心館に2013年4月に開設され、国内の大学で最大級となる2550㎡（本学の約10倍）の床面積を持ち、図書館併設ではなく独立型である。2階部分は「クリエイティブ・コモンズ」、3階部分は「リサーチ・コモンズ」と呼ばれている。

開室時間は平日・土曜が9～22時、日曜が10～17時であるが、休業期間が春夏冬の各期休業日にあることから、授業期間との関連性を重視していることがうかがえる。入館には学生証が必要であり、図書館と同様にゲートが設置してある。そのため個人レベル・分単位の利用状況まで把握することが可能であるが、データとしてそこまでの精度は必要ではないので、学部レベルでの人数をカウントしてる。利用者数は前期3,500～5,000人／日、後期2,500～3,000人／日である。前期に利用者が多いのは初年次教育科目があるためだと推定されるという。

2階の「クリエイティブ・コモンズ」は「プレゼンテーションコート」「インフォメーションカウンター＆PCロッカー」「グローバルビレッジ」「グループワークエリア」「インフォダイナー」「学習支援準備室」の6つのエリアに、3階の「リサーチ・コモンズ」は「グループスタディルーム」「ワークショップルーム」「アカデミックサポートエリア」「マルチメディアラウンジ」「プリントステーション」「自習検索エリア」の6つのエリアに分けることができる。なお、「インフォダイナー」など一部エリアでは飲食可能である。また、2階の「学習支援準備室」、3階の「ワークショップルーム」（2室のうち1室）を除いて基本的に間仕切りがなく、柔軟性・開放性が高められている。

同志社大学ラーニング・コモンズの最も大きな特徴は多様なスタッフが常駐しているという点である[5)]。具体的には「アカデミック・インストラクター」「ライティング・インストラクター／アシスタント」「ラーニング・アシスタント」「情報検索アシスタント」「留学準備アシスタント」「学習支援コーディネーター」「統括事務担当者」「ICTサポートスタッフ」「プリントステーションスタッフ」である。

アカデミック・インストラクターは3名が常駐しており、身分は「教員」である。業務としては学生への学習指導、ラーニング・アシスタントの指導・育成、ラーニング・コモンズのイベント企画・開発、教員へのコンサルテーション、FDプログラム開発実施への協力、その他ラーニング・コモンズの運営に関わっている。ラーニング・アシスタントは主に博士課程の大学院生であり、2013年は14名在籍である。受付時間は10～19時で、シフトを組んで交代で対応している。アカデミック・インストラクターによる10コマの研修（ラーニング・コモンズの基礎知識、コミュニケーションスキル、各学部のカリキュラム・履修科目、ワークショップ等の理論と実践、模擬アドバイジング練習など）を受けなければならず、アカデミック・インストラクターの指導・監督の下に学習支援を行う、という位置づけである。業務としては、これまでの卒論・修論の執筆を生かし、文章やレポートの組み立てについての学習相談や、ICT機器の操作法、学術情報やデータベースへのアクセス方法等についても相談を受ける。相談がない時間帯には「ラーニングチップス」（FAQのようなもの）を作成している。ライティング・インストラクター（嘱託職員）／アシスタント（大学院生）は主に日本人学生に対して英文ライティングの指導を行うものである。情報検索アシスタントは図書館からの派遣となり、レファレンスや図書関係情報リテラシー教育プログラムの立案・実施を行う。ここまでが3階アカデミックサポートエリアに常駐してサービスを提供している。

留学準備アシスタントは国際センターからの派遣であり、2階グローバルビレッジで学生の留学相談や関連企画の立案・運営を行う。学習支援コーディネーターは嘱託であり、運営に関する庶務業務一般、利用方法への助言等を行っている。ICTサポートスタッフには3種類あり、ICT機器に関する専門的な支援や高度なメディア利用支援を行う「マルチメディアラウンジ・技術スタッフ」、利用者受付、イベント実施の補佐、システム検証を行う「マルチメディア・アドバイザー」、学生アルバイトによる簡単なPCの操作支援や消耗品補充を行う「補助員」、である。ここで目指されているのは正課カリキュラムのレベルを上げていくことである。そのため図書館がラーニング・コモンズを設置するのではなく、学習支援センターが行わなければならなかったのであった。そして正課カリキュラムを高めるためなので、授業と関連させるのが利用の前提と考えており、関連しないサークル等の話し合いは推奨されていない。

5節　九州工業大学

九州工業大学のラーニング・コモンズは、2011 年 4 月に図書館とは別に飯塚キャンパス内に「MILAiS」（320 ㎡）として開設され、2013 年には戸畑・飯塚両キャンパスの附属図書館内に、それぞれ開設された。そのため同大学では図書館併設型と独立型の両方が存在しており、合計で 3 カ所に設置されている。

MILAiS は専属スタッフとして教員 1 名、事務員 1 名がおり、勾玉型テーブルで構成されている。通常は 90 名、最大 110 名まで利用可能である。利用者数は多い時で 80 人／日であり、飯塚キャンパス在籍の学生が 1,500 人であることを考慮すれば低くはない利用率であるといえる。基本的には授業による利用、それ以外の時間帯をラーニング・コモンズとして利用してもらう、という位置づけである。授業は少ない時でも 1 日 2 コマの利用があるが、授業によっては半分に区切って利用していることもあり、授業に利用されていない側はラーニング・コモンズとして利用可能である。これがコンセプトの一つである「常に誰かと空間を共有できる」ということが具現化しているということができるだろう。

利用に当たっては利用登録が必要となる。登録は 2 段階であり、利用に当たっての説明を受けた上で仮利用証が発行され、1 ヶ月後に更新を行うことで本登録となる。その後は学期ごとに更新が必要となる。ラーニング・コモンズ利用時は登録証を学生スタッフが確認している。これは利用を管理するというよりは、学生スタッフを含めた MILAiS 側と利用学生側の接点を作り出したいという意図によるという。逆に MILAiS 側から利用している学生に対して働きかけを行うことはしていない。それは自主的な学習が必要とされている空間であるため、「お客」になってしまってはならないという考えのためである。
図書館分館 2 階に開設されたラーニング・コモンズは、「アクティブラーニング・エリア」「学習コンシェルジュ・エリア」「グローバル・コミュニケーション・エリア」に分かれている。開室時間は図書館に準じている。

このうち学習コンシェルジュ・エリアは情報・物理・数学・英語に関して教員が相談・指導を受け付けるものである。今学期は英語は毎日（平日）、その他の教科は週 2 回、常駐している教員に自由に相談することができる。また、学生の能動的な学習や活動を支援する学生組織として「ALSA」（Active Learning Student Assistant）がある。この学生は学習支援に関する講習を受講しており、学生活動場所は図書館ラーニング・コモンズおよび開設予定のラーニング・アゴラとなっている。図書館ラーニング・コモンズに常駐しているので、スペースの割り振りを行ったり学生からの相談に応じたりしている。

図書館本館 1 階に開設されたラーニング・コモンズは「カフェラウンジ」「メディア／ AV エリア」「グループラーニング／プレゼンテーションエリア」「先端教育支援 PC エリア」「コミュニケーション／オープンスペースエリア」に分かれている。開室時間は図書館に準じている。各エリアは完全に区切られているというわけではないが、「カフェラウンジ」のみ図書館入り口の脇に設置されている。「グループラーニング／プレゼンテーションエリア」にはプロジェクター等のプレゼンテーションツールがあり、「コミュニケーション／オープンスペースエリア」は自主学習、イベント等に利用されている。

学生スタッフとしては「ラーニングコモンズサポーター」がある。応募資格は学部 4 年生および大学院生である。今学期は 9 名が在籍しており、交代で毎日 2 時間程度、学生への学習相談・図書館における情報検索、PC の基本的操作法やレポート・プレゼンテーション作成の指導・助言などが業務である。また、サポーターによる講習も行われており、C 言語講習などの実績がある。採用時には図書館資料検索講習や対人関係講習（保健センターによる）が行われる。業務の一環としてブログ（http://kyutechlc.blog.fc2.com/）での活動報告も行われている。授業ではあまり活用されておらず、専ら学生による自主学習が中心となっている。ただし、初年次教育として図書館が授業を担当することがある。

6 節　まとめ

各大学に設置されており、本学でまだ取り組めていない課題としては学生スタッフ制度がある。立命館大学および九州工業大学図書館の実践では、ラーニング・コモンズのスタッフであると同時に図書館のスタッフでもある、という位置づけになっているが、九工大では学習相談を受けることが主な業務となっている。

九工大および同志社大学では学生スタッフに対して一定時間の研修・講習を行った上で業務に当たってもらっている。その内容はグループ学習などの方法論といった社会教育的アプローチだけではなく、学習科学といったコミュニケーション論・認知心理学的な側面からも基礎的な研修を行っていた。

現時点では本学において利用する学生が何を求めているのかを丹念に認識していくことが必要であると考えるため、2014 年度のうち少なくとも前期は学生のニーズを調査することに集中していくのがよいといえるだろう。立命館および九工大では本学に見られるような「学習成

果の掲示・提示」は行われていなかった。それは何らかの学習に対する先入観が発生してしまうことを避けるという意味があるといえるが、その一方で教育に関する専門的なスタッフがいないということもあるのではないだろうか。同志社ではスクリーンを使用したイベント報告が行われていたが、そのような大規模なものではなく、小グループの学習成果とその過程を前向きに評価するとともに、他のグループが参考として取り組みやすい「見本」を提示していくことも必要である。

まとめと今後の課題

ラーニング・コモンズで学習を行うことの特徴としては、学生個々人が自由に意見を述べることができる環境があるということが挙げられる。それは開放的で明るい雰囲気、付箋・模造紙・ホワイトボードなど、どんなに小さな意見であっても記録しておくことのできる道具類、1卓あたり最大6名という少人数グループの形成、といった環境であり、これらにより授業への主体的な参加や自由な意見の出し合い、さらには創造的な意見の提起が促進されるといえるのである。また、グループによる発表を行うことは、他者の意見に耳を傾け、それを踏まえた上でグループ内で合意の形成が行われる必要がある。このような活動により授業のテーマに関する学習だけではなく、意見の表明や合意の形成などといったジェネリックスキルの涵養も行うことができるといえるだろう。

また、終日開室することにより、時間にとらわれることのない学習活動を支援できているということもできる。例を挙げるならば、教育実習終了後に20時過ぎより数名で実習についての意見の出し合い・反省会を行っているグループがあり、場合によっては深夜まで意見が出ることもあるという。日中に他の授業や実習がある学生に対しては話し合える場を常に提供できていることは大きな学習効果があるといえる。

これらの効果を得るには専任スタッフが常駐することが大きく関わっているといえる。スタッフが学生個人、あるいはグループから一定の信頼を得ることで主催事業への積極的な協力やラーニング・コモンズ自体への意見、また、グループワークやワークショップ運営に関する相談を寄せるなど、主体性の形成に効果が見られるといえる。これに加えてスタッフにより学生と学生、あるいは学生と教員を結ぶようなコーディネートが行えた。これらはラーニング・コモンズが学生にとっての「居場所」「交流スペース」としても機能しているといえる。

これらのような学習形態を持つ教育機関としては社会教育施設である公民館が最も近い。すなわち、社会教育主事・公民館主事のような専門スタッフの在籍、環境醸成および助言・指導を基本とした活動、自ら課題を発見し、主体性を持って取り組むという学習形態など、ラーニング・コモンズはいわば「大学の中の公民館」であるということができるだろう。すなわち、講義に見られるフォーマルエデュケーションに対してノンフォーマルエデュケーションということもでき、さらには「居場所」として利用している学生としてはインフォーマルエデュケーションの場としても捉えることができるだろう。

2013年度の振り返りおよび他大学における取り組みを通じて明らかとなった今後の課題としては4点挙げることができる。この課題提起で本稿のまとめとしたい。

1点目としては利用者の拡大である。上述の通り広報活動についても取り組んでいるが、ラーニング・コモンズの設置場所が国際学部に隣接していることもあり、同学部および留学生・国際交流センターの学生による利用が多い。そのため教育・農・工学部の学生に対してもさらに利用を呼びかけていく必要があるだろう。

2点目としては主催事業の充実を図ることである。学生からの相談として、やってみたい企画・話し合ってみたいテーマはあるが、参加者の集め方や話し合いの進め方がよくわからない、といったことがある。これらに対してはスタッフによる助言を行っているが、学生から提案されたテーマを現在行っている「カフェ・コモンズ」や「30分セミナー」で取り上げ、話し合い学習の場を設定することが考えられる。これにより気軽に参加し手法を学ぶ、あるいはグループを形成するといった効果期待できる。

3点目としてはアクティブ・ラーニングの宇都宮大学における定義の検討である。現在宇都宮大学におけるアクティブ・ラーニングはアクティブ・ラーニング科目として明確に設定されてはいるものの、具体的な内容や手法については十分に認識されているとはいえない。また、それら科目以外であってもアクティブ・ラーニングを取り入れている場合がある。そこでどのような内容や手法が望ましいといえるのかをアクティブ・ラーニング科目担当者やアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行っている教員を交えて話し合う必要があるといえるだろう。これを通じて宇都宮大学におけるアクティブ・ラーニングを具体的に深めていくことが求められているといえる。また、前述のフォーマル／ノンフォーマル／インフォーマルエデュケーションについてもまだ仮説の段階であるので、継続して研究を進めたい。

そして4点目としては他部局との連携・協力体制の構築である。ラーニング・コモンズにおける教養教育の充実を図っていくためには、学内他部局の持つリソースを活用した連携も模索していく必要がある。また、ラーニング・コモンズを設置している多くの大学では図書館を中心として運営しており、図書館との親和性が高いと考えることができる。そこで図書館との連携について検討を進めている。連携の形としては、キャリアセンターのように、最新号の雑誌などを置く、本学図書館の「学生選書ツアー」および「学生選書コーナー」に関連して、「ビブリオ・バトル」のような企画を行う、アカデミック・スキルに関連した図書の紹介や、引用を行う際の書誌情報の記述、文献の調査法などをテーマとしたセミナーの開催、展示資料を利用した「30分セミナー」あるいは「カフェ・コモンズ」でのワークショップ、新入生向けの図書館案内や資料検索・調査手法の紹介、在校生向けに「今さら聞けない図書館」といった企画、などが考えられる。来年度中の早い時期に試験的にいくつか開催できるよう調整を進めていきたい。

＜資料＞

【30分セミナー】

回	第1回
テーマ	優に近づけるレポート作成
講師	廣内大輔（基盤教育センター）
日時	①7月16日（火）12時10分～40分、②7月18日（木）16時10分～40分
参加者数	60名（延べ）
内容	前期レポートの課題が出されてきていることを受け、レポートをそもそもどのように構成したらいいのかについて講義を行った。レポートについては各授業などでたびたび指導を受ける機会あったと考えられるが、今回は授業を離れて開放的な空間において気軽に聞いてもらおうとするものであった。

回	第2回
テーマ	アイディアを引き出す30分
講師	桑島英理佳（基盤教育センター[6)]）
日時	①10月25日（金）12時10分～40分、②18時00分～30分（②はUUプラザにて開催）
参加者数	7名（延べ）
内容	グループでの課題解決のため、とりあえず何でもいいのでアイディアを出し合おう、とする時に有用な手法としてブレーンストーミングがある。これはあるキーワードや問いかけに対して、どのようなものでもいいのでアイディアを出す（例えば「バケツの使用法を思いつくだけ述べよ」など）もので、そこからいくつかのキーワードをピックアップしてさらに深めていくことを目指している。今回は30分という限られた時間での体験となったため、問いかけを含むような講座はカフェ・コモンズでの開催とするのも一案であったといえる。

回	第3回
テーマ	話し合いを深める手法「ワールド・カフェ」をやってみよう
講師	廣瀬隆人（地域連携教育研究センター）
日時	12月16日（月）12時10分～40分
参加者数	5名
内容	今回は模造紙とカラーペンを使った手法について解説した。1枚の模造紙に各自が書き込み、関連性を意識しながら次のテーマを導き、また書き込み合意点を探る、といった作業をする中で、考えを文字化し、他者と関わる中で明確にしていくことができたといえる。

回	第4回
テーマ	先生がやってみ。
講師	廣内大輔（基盤教育センター）、若園雄志郎（基盤教育センター）
日時	2014年1月15日（水）12時10分～40分
参加者数	7名
内容	後期レポートの課題が出てきたことを受け、レポート関連の内容であった。今回は通常とは逆に教員に対してレポートの課題を出してみることとし、事前にキーワードを学生から募集した上で、当日無作為に選んだものに対して教員が5分程度でレポートの体裁・構成を考えるというゲーム的要素のあるセミナーとした。もちろん単なるゲームとはならないために、なぜそのような構成としたのか、与えられた課題に対してどのような切り口があるのかを提示し、学生の柔軟性を引き出すことが目的であったといえる。セミナー終了後の学生からの感想では、「自分が思いつかないアプローチが聞けておもしろかった」といったものが寄せられており、今後はカフェ・コモンズの時間を利用してさらに掘り下げてみるのもいいように思われた。

【カフェ・コモンズ】

回	第 1 回
テーマ	ラーニング・コモンズをどうしたい？
ファシリテーター	若園雄志郎（基盤教育センター）
日時	9 月 25 日（水）15 時 00 分～ 17 時 00 分
参加者数	7 名
内容	今回は 10 月からラーニング・コモンズが移転することに伴い、2014 年度からの新ラーニング・コモンズがどのような空間であると利用しやすいかについて、また「利用申し合せ」の策定を見据え、学生からの意見を聞く機会として設定した。その中では什器類や機器類について要望が寄せられるだけではなく、気軽に学習に関して相談できる学生スタッフの必要性についても発言があった。これらは 2014 年度からのラーニング・コモンズ運営に確実に反映させていくべき課題であるといえる。

回	第 2 回
テーマ	まんじゅう VS ケーキ
ファシリテーター	蜂屋大八（基盤教育センター）
日時	10 月 31 日（木）12 時 50 分～ 14 時 20 分
参加者数	9 名
内容	今回のテーマについては非常にわかりやすいものとした。当然のことながら、優劣について結論を出すことが目的ではなく、「話し合うこと」「アイディアを出すこと」そのものが目的である。このような参加者全員が何らかの形で関わったことのあるものをテーマとすることは、誰もが意見を言うことが可能であるため、話し合いを行う前のアイスブレイキングに有用であるということができる。

回	第 3 回
テーマ	みんなでワークショップ
ファシリテーター	桑島英理佳（終章学センター）、若園雄志郎（基盤教育センター）
日時	2014 年 1 月 28 日（火）12 時 30 分～ 14 時 00 分
参加者数	4 名
内容	今回については学生から寄せられた相談を受けての開催となった。学生からの相談は、自分たちでワークショップを行ってみたいのだが、その手法がわからない、というものであった。そこで、ラーニング・コモンズのスタッフを交えて模擬的にワークショップを行ってもらい、助言・アドバイスを行った。

＜注脚＞

1) 米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ　大学図書館におけるネット世代の学習支援」（国立国会図書館関西館事業部図書館協力課編『カレントアウェアネス』No.289、日本図書館協会、2006）、p10。

2) 簡易計測器を設置し、南側出入り口を通過した人数をカウントした結果、15009 カウントであった。入室・退室でそれぞれ 1 カウントとなるため延べ約 7500 人となるが、一時退室や隣接する建物への通過がそのうちの半分と考え、約 3750 人と推定した。

3)「ナイト・コモンズ」は 10 月 18・25 日（金）に試験的に開催し、11 月 1 日から 2014 年 2 月 21 日までの月・水・金曜日の 18 ～ 22 時を開放することとした。延べ 41 日間（うち 4 日は別団体による UU プラザの予約および天候悪化のため短縮開室）開室し、421 人の利用（1 日平均約 10 人）があった。

4) 小幡誉子「図書館外ラーニング・コモンズにおける学習支援の実践―大正大学の事例を通じて―」（大学教育学会第 35 回自由研究発表（東北大学）2013）、および小幡誉子「大正大学における図書館外ラーニング・コモンズの効果と課題―アンケートによる比較調査の結果から―」（『大学マネジメント』vol.9 No.7、大学マネジメント研究会、2013）。

5) スタッフについては聞き取り調査に加え、提供された資料である「ラーニング・コモンズ運営組織と人的資源の配置について（案）」を参照した。

6)2013 年 12 月 1 日より終章学センター所属。